

富山市埋蔵文化財調査報告 77

富山市内遺跡発掘調査概要 XV

—太田本郷城跡・千石町地内埋没樹木群—

2015

富山市教育委員会

例 言

- 1 本書は、富山市教育委員会埋蔵文化財センターが実施した埋蔵文化財調査等のうち、太田本郷城跡（平成3・12年度）・千石町地内埋没樹木群（平成26年度）の調査報告書である。
- 2 千石町地内埋没樹木群については、工事主体者の協力により自然科学分析を行い、その結果をⅢ章に掲載した。
- 3 現地調査から報告書作成に至るまでに、次の方々の指導・助言・協力を得た。記して謝意を表します（順不同、敬称略）。
大野淳也、柏木健司（富山大学）、木村勝彦（福島大学）、貴堂 巍、金龍教英、木本秀樹、
鈴木景二、高岡 徹、高島英之、西井龍儀、広田克昭（故人）、藤田富士夫、堀沢祐一、
麻柄一志、宮田進一（故人）、山崎和夫、魚津市埋没林博物館、社会福祉法人富山ふなん会、
富山県埋蔵文化財センター、富山市郷土博物館
- 4 出土品及び原図・写真類は、富山市教育委員会が保管している。
- 5 本書の挿図・写真的表示は次のとおりである。
 - (1)方位は真北、水平水準は海拔高である。
 - (2)構造記号は、溝・堀：SDを用いた。
- 6 本書の執筆は、Ⅲ章を除き、古川知明が行った。

目 次

例言・目次	1
I 太田本郷城跡	2
II 千石町地内埋没樹木群	32
III 千石町地内埋没樹木群の自然科学分析	34
報告書抄録	40



調査位置図 1 太田本郷城跡 2 千石町地内

I 太田本郷城跡

1 調査にいたる経緯

太田本郷城跡（富山市遺跡番号 2010569）は、昭和 51 年富山市教育委員会発行『富山市遺跡地図』に No.161 として初めて登載された遺跡である。当時の地名表では、戦国時代城跡とし、「七堤等表微不明」と記載されている。この時、城跡の範囲がわからないことから、遺跡の位置はドットで示され（図 1 ドット部分）、刀尾神社北側 50m ほどの位置が遺跡とされていた（図 1 ドット部分）。明治 44 年地形図においても周辺一帯は水田表記であり、痕跡は見えない。

平成 3 年 9 月、太田南町地内 の市道拡幅工事中に、土器が出上したという情報を受け、現地確認を行ったところ、中世のかわらけ多数が出土していた。このため工事をいったん中止し、掘削予定部分の発掘調査を急遽実施することとした。

発掘調査は、9 月 17 日から 19 日の 3 日間で行い、35 m² の完掘を行った。調査の結果、堀跡とみられる溝の一部が検出され、中から弥生～古墳時代の上器、中世のかわらけ・珠洲・青磁・炭化木片が出土した。かわらけには墨書き文字や線描とみられるものが数点あり、注目された。調査の完了後、現場を引渡し、工事を再開した。

発掘調査の結果、かわらけの年代は、白鳥城跡出土かわらけと類似し、16 世紀後半頃と推定した。この年代は、記録に現れる太田本郷城の年代と一致し、堀跡という遺構の性格も踏まえると、これが戦国期太田本郷城跡を構成する堀の一部と考えられた。

のことから、この遺構を中心とした半径 150m 程度の範囲を太田本郷城跡とし（図 1〇部分）、平成 5 年 3 月富山市教育委員会発行『富山市遺跡地図（改訂版）』に No.494 として、推定位置及び範囲を示した。この時の推定遺跡面積は約 21,000 m² であった。

平成 12 年 4 月、遺跡内において、1,794 m² の駐車場造成計画が富山葬祭協業組合により立案され、埋蔵文化財の照会がなされた。全域が遺跡範囲に含まれていたため、4 月 24 日から 25 日の 2 日間で試掘確認調査を行い、1,520 m² に遺構を確認した。調査区東端は、北に流れる旧河川流跡であった。この部分は遺跡から除外した。水田下 25cm ~ 75cm の深さで検出した遺構は、戦国後期の堀・溝・掘立柱建物・烟跡等である。出土遺物は、弥生～古墳時代七器、平安時代土師器・須恵器、戦国時代かわらけ、中世八尾焼・珠洲焼がある。弥生～古墳・平安時代の遺物が出土したことで、城郭以前に各時代の集落遺跡が存在していたことを示唆する。

この調査成果に基づき工事主体者と協議した結果、掘削を行わず盛土で工事を行うこととした。このため慎重工事を指導する方針とした。

この調査により、南北に延びる堀跡が確認され、平成 3 年度の調査で検出された東西の堀跡の存在から、2 本の L 字形の堀によって囲まれた範囲が建物等の存在する曲輪であることが判明し、城郭遺構の範囲がより明確になったといえる。



図 1 太田本郷城跡の位置比定
(下図は明治 44 年地形図) 1:20,000

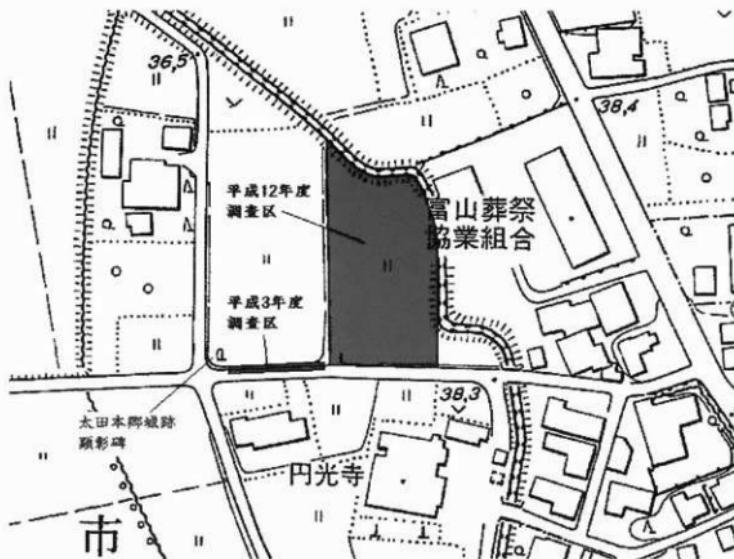


図2 太田本郷城跡調査区域（網目）

1:1,500

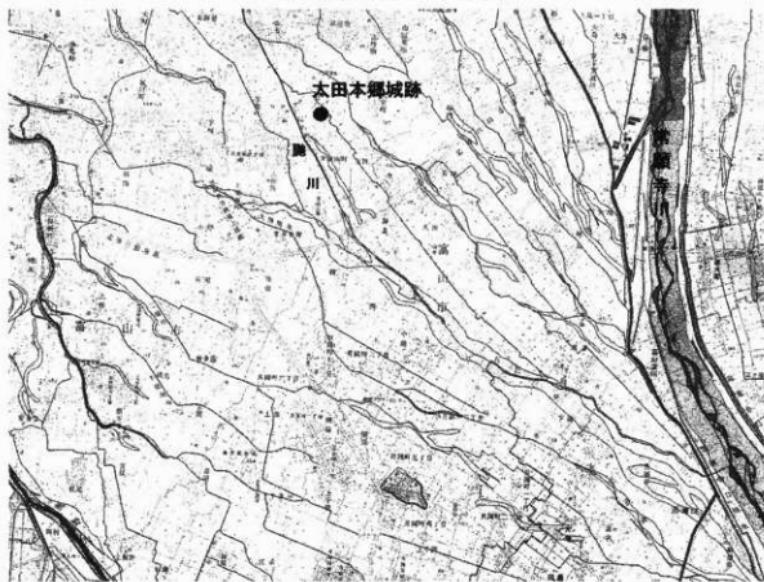


図3 周辺地形図（平成 17 年 3 月国土地理院調査成果図を引用）

薄い網点は旧河川流路（水域）

平成 25 年 3 月に改定した遺跡地図では、遺跡番号を 569 に変更した。範囲・内容の変更はない。

II 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

太田本郷城跡は、常願寺川左岸扇状地上に立地し、標高は 38m である。常願寺川は富山市上滝から大きく東西に広がり、東西 13km 以上、南北 9km と広大である。扇頂部から扇央部にかけての傾斜は、県内河川扇状地で最も急勾配とされる。常願寺川本流は急流でかつ天井川である。左岸扇状地においては、本流から北西方向の支流が優勢で、なかでも富山城下町東に至る馳川（いたちがわ）が最も大きい。この支流馳川の右岸上に太田本郷城跡が立地している。扇頂部からは下流へ 8.5km、本流からは西へ 4km の位置になる。周辺支流は幾度も川筋を変え、その痕跡が方々に小段差として残る。馳川もそのような河川の一つであった（図 3）。

馳川は「太田本郷城跡」顕彰碑から西 270m に存在する。現在川幅は 10m 程度であるが、かつては倍以上の広い河川敷を有しており、水勢の強い河川であった〔島原・中川編 2004〕。

周辺の底質は河川疊で、上層には砂礫またはシルト質砂が堆積する。これは度重なる常願寺川洪流水堆積層である。戦国期の地山層は黄色シルト質砂で、堀や柱穴の基底面は礫が露出するところも多くみられ、安定的なシルト質層の厚い堆積はほとんどない。

2 歴史的環境（図 4）

常願寺川左岸扇央は安定した平坦地であり、縄文時代から人々の生活痕跡が認められるようになる。

縄文時代は晩期以降の土器が山室東田遺跡（560）で出土しているが、遺構は確認されておらず、集落の形成があったかどうか不明である。

弥生終末～古墳時代前期には、本郷椎木遺跡（561）で竪穴住居跡複数が検出されており、この時期から安定的な集落の形成が始まったことがわかる。太田本郷城跡や本郷水上遺跡（562）でもこの時期の土器がわずかに出土している。

奈良・平安時代になると遺跡数は増加する。山室東田・太田中田Ⅱ（568）・本郷椎木・太田本郷城跡・太田南町（570）・大宮町（571）・上新保（564）・本郷町（565）・上堀（563）の計 9 遺跡が確認されている。このうち上新保遺跡では大規模な発掘調査が行われ、集落の概要が判明している。飛鳥時代 7 世紀前半から開始されるが建物は明らかでない。8 世紀以降建物形成が開始され、10 世紀初頭までの間に竪穴建物 167 棟、掘立柱建物 36 棟が検出され、大規模な集落が継続的に形成されたことが明らかになった。転用硯や「真」「平」等の墨書き土器、「夢丸」刻字の印章形石製品などが出土しているが、官衙的な性格ではなく、開墾集落と推定されている〔富山市教委 2000・2009a・2009b〕。この遺跡が母体となって開墾に携わった荘園等あるいは有力者等については不明である。

中世にはこの周辺は国衙領太田保に含まれる。太田保は、12 世紀初頭頃に成立したとみられており、南北朝期には一部が管領細川氏の知行地となった。永正 12 年（1515）越後長尾勢の乱入以後、一向一揆方と太田保国人土豪層、上杉氏と神保・織田氏らの抗争が展開した。太田本郷の地名は、戦国期には「太田上郷」「太田下郷」、近世には「太田本江」、「本江」、「本郷」等と記される。

鎌倉～室町時代には、ほとんどの遺跡において形成が認められ、古代よりも密度が高いといえる。上新保遺跡では少数の掘立柱建物や地割溝、畑跡が検出され、青磁・白磁の輸入陶磁のほか鍛冶関係遺物が出土している〔富山市教委 2000〕。開発領主クラスの存在が推定されるものの、中核的な集落形成までは至っていない。

戦国後期には、本書で報告する太田本郷城跡の形成がある。遺跡に含めていないが、城跡より北

の水田においてわざかながらかわらけが採集されており、城下町あるいは家臣集居住地の形成が推定される。

近世には、富山町から立山へ向かう鶴川沿いの亀谷往来（上滝往来）が、立山信仰道あるいは鉱山道として主幹道となった。この幹道に面し、鶴川を背にして刀尾神社と別当寺刀尾寺が存在する。この刀尾神社の成立は不明であるが、太田本郷城の関連が検討される必要がある。

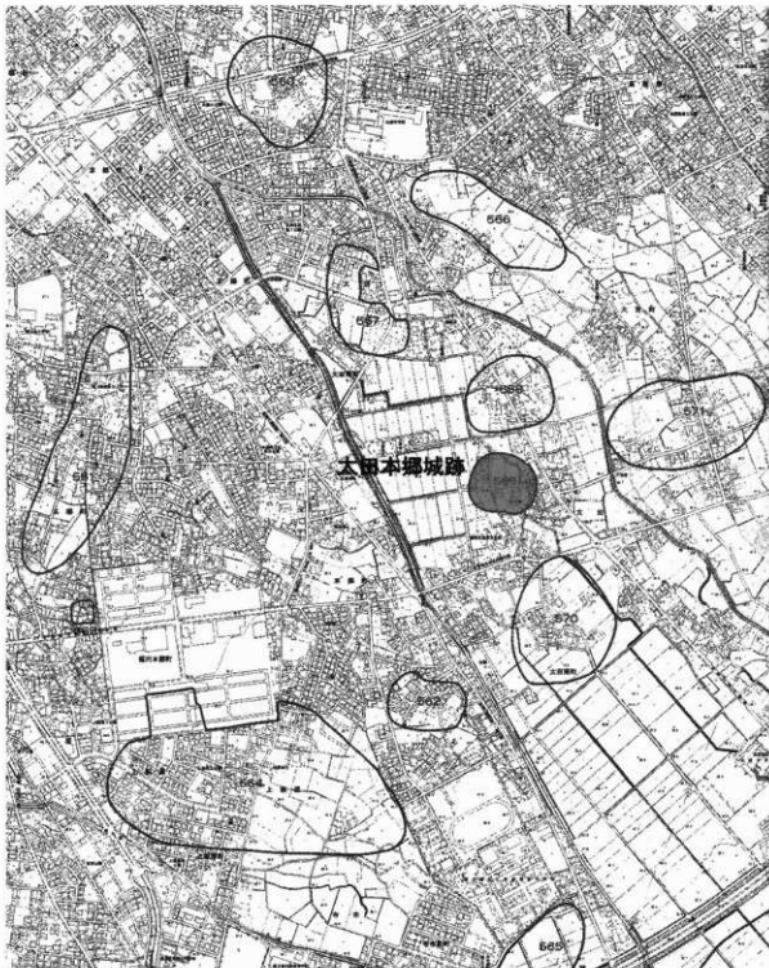


図4 太田本郷城跡(網目)と周辺の遺跡

(1:10,000) (番号は市道跡番号 201以下の下4桁番号)

III 調査の成果

1 平成3年度調査

(1) 遺構

堀跡（図5）

延長 17.5m、幅最大 1.8mを検出した。堀幅はさらに南側へ広くなるが、道路下のため確認できなかつた。堀底は平坦で、箱堀を呈する。堀側面は、底面から丸みをもつて斜めに立ち上がる。

検出した深さは、西端で 20cm、東端で 30cm であり、堀底高さは、西側が東側より 18cm 高い。よつて、堀は西から東へ勾配 1.143% (0.655 度) で傾斜することがわかる。この方向は地形の自然傾斜（東から西、南から北）と相反している。

後述するように、この堀は東へ延び、平成 12 年度試掘調査で検出した南北方向の堀と接続すると推定されることから、そこへ水を流すために自然勾配と反対の方向にしたものと考えられる。

堀の構築は、地山の黄灰色砂礫土を掘り込んで行つてゐる。堀底面は砂礫が露出し、凹凸が大きい。地山からの掘り込みは 20~30cm と浅いが、かつてはその外側に土壘が存在していたと推定される。

堀の覆土は、西側底面直上は厚さ 5cm の細粒砂が堆積し、その上にシルト質土、最上部は黒色腐植質土が水平堆積する。側壁は斜めに立ち上がり、底面との接続部は丸みをもつ。側壁への流れ込み土は少ない。側壁の一部には鉄分の付着がみられ、堀が水で満たされていたことを示す。側壁の検出は北辺のみであるため、堀の幅は不明である。

堀の覆土内からは多量の遺物と 2~20cm 大の円礫が多く出土した。円礫は自然礫である。遺物の出土状態は、底面直上のものはほとんどなく、3~20cm ほど浮いた状態である。まとまつたプロックが複数あり、一括廃棄的な様相を示す。戦国~安土桃山期のものを主体とし、ほとんどが土師質のかわらけである。破片の一部は 3 か所に分散し、最大 4.3m 離れたものが接合した。これらの出土状況は、堀の構築後しばらくの期間を置いてかわらけが投棄されたことを示している。

弥生時代から古代の土器が少量含まれるが、混入である。

(2) 遺物（図 6~11）

遺物はすべて堀内部からの出土である。

① 弥生後期土器

1 は、壺口縁である。有段の口縁で、直立して外傾する。内外面とも調整は横方向のヘラミガキである。弥生後期後葉の白江式期頃か。

② 須恵器

杯蓋（2）・杯身（3）がある。いずれもやや薄い作りで、9世紀代のものと思われる。

③ 珠洲

壺（4~5）・片口鉢（6~8）がある。

4 は、体部破片の割れ面すべてに褐色の漆が付着しており、漆継ぎを行つた痕跡を示す。

6 は、7 本の御し目が曲線文となつてゐることが特徴で、吉岡康暢による珠洲編年 II 期にあたる。

7 は底部で、内面は摩耗が著しく光沢を放つ。御し目の数は 8 本である。

8 は内面にやや細かい御し目を密に施し、御し目の数は 8 本である。胎土には砂粒が多い。内面下部はかなり摩耗している。吉岡編年 V 期以降である。

5~8 の胎土には海綿骨針を含む。

④ 瓦質土器

9 は、直径 30cm の底部で、風呂等が推定される。このほか器壁の薄い個体片がある。

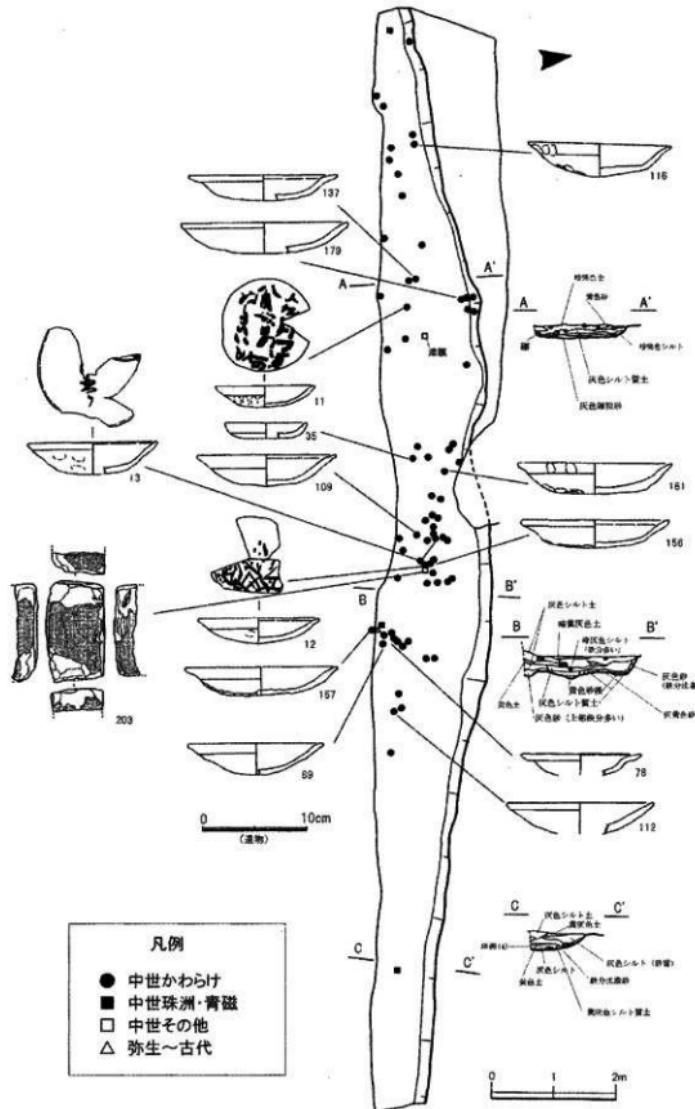


図5 堀跡実測図

⑤青磁

10 は、口径 16cm の碗である。

口縁は短く外反する。

⑥かわらけ (11~202)

破片数は 300 点以上があり、うち完形品は 3 点のみである。図化できたものは 191 点である。(グラフ 1)

法量についてみると、口径は 6.8~18.4cm に分布する。小形品 (6.8~9cm)、中形品 (12~15cm)、大型品 (16~19cm) に概ね区分される。14cm 代の中形品が最も多く 35% を占め、次に 12cm 代が多い。中形品が全体の 6 割を占め、最も多い。

器形は、底が平たく、体部から口縁が内湾気味に立ち上がるもの (35) 以外は、底部が丸く、口縁部はやや外反気味となる一群である。概ね以下に細分される。

- A 小形品で、口縁は外傾する。口縁端部が外反するものは少ない (14~46)。
 - B 中形品で、口縁は外傾、または端部が短く外反する (47~94)。
 - C 中形品で、口縁は外傾、または端部が短く外反する。口唇部は内面を浅くナデるもの、先端部が細くなるものがある (95~171)。
 - D 中~大形品で、口縁は外傾、または端部が外反し、先端部が細くなるものが多い (172~201)。
- 富山県内における中世土師器編年は、宮田進一 [宮田 1997]、森隆 [森 2003・2005] が行っていている。これらと上記を照らし合わせると、宮田編年においては、35 は V 期 (15 世紀後半~16 世紀前葉)、それ以外は VI 期 (16 世紀代) であり、森編年においては、35 は後 IV~後 V 期 (16 世紀前半)、それ以外は後 VI~後 VII 期 (16 世紀後半) に比定できる。

以上の検討により、本遺跡のかわらけは、16 世紀前半から使用が開始され、大多数は 16 世紀後半にまとまって使用・廃棄されたと考えられる。

墨書きは小形品 1、中形品 2 の計 3 点がある。

11 は、内面いっぱいを使って太く達筆で書かれている。これについての検討は後段でおこなう。

12 は、内外面とともに墨書きがある。長短の直線と曲線で構成され、前者が多い。文字らしき部分もあるが判読は不能である。内面は、周囲の列点状のもの、直交や斜交する線群のありかたから考えると建物のある風景文様かもしれない。外面は草花などの文様が推定される。

13 は、内外面とともに墨書きがある。内面は、蛇行する線群が中央と一部の体部に見られる。外面は体部外面に長い線が複数あり、文字とも文様とも判別がつかない。

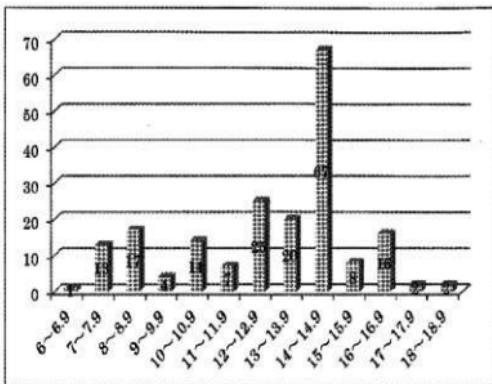
これら 3 点は同時期のものである

灯明皿に転用されたかわらけは、5 点のみで 3% 以内の少数である。

全体の中で完形品は 3 点しかなく、破片が多い。墨書きのあるものも欠損し、周囲に破片は見当たらない。このことから、壇に投棄される以前に割られたものが大多数であったことがわかる。

⑦煉瓦

202 は形状の素焼煉瓦である。長辺 15.0~16.9cm、短辺 8.5~9.0cm、中央で最大幅 10cm、残存厚さ 4cm で、半割れのため原形の厚さは不明である。原形をとどめる各面には、整形された平坦面



グラフ 1 かわらけの口径別数量

が残存しており(図11中綱部分)、木目とみられる痕跡が残ることから、整形は板状の工具を使用したとみられる。側辺の一部に、30mm×9mmの光沢のある褐色塗膜が認められ、刷毛状の筋が見られる。漆と思われるが分析は実施していない。漆とすれば接着が目的と推定される。

胎土には、裁断して1~10mm程度の細片となった植物が大量に含まれており、重量は165gと非常に軽い。

⑧漆膜 漆碗または漆皿の木質部が腐食し、漆膜のみが残ったもの。赤漆で、内面側に木質部の繊維痕を残す(写真p29下)。

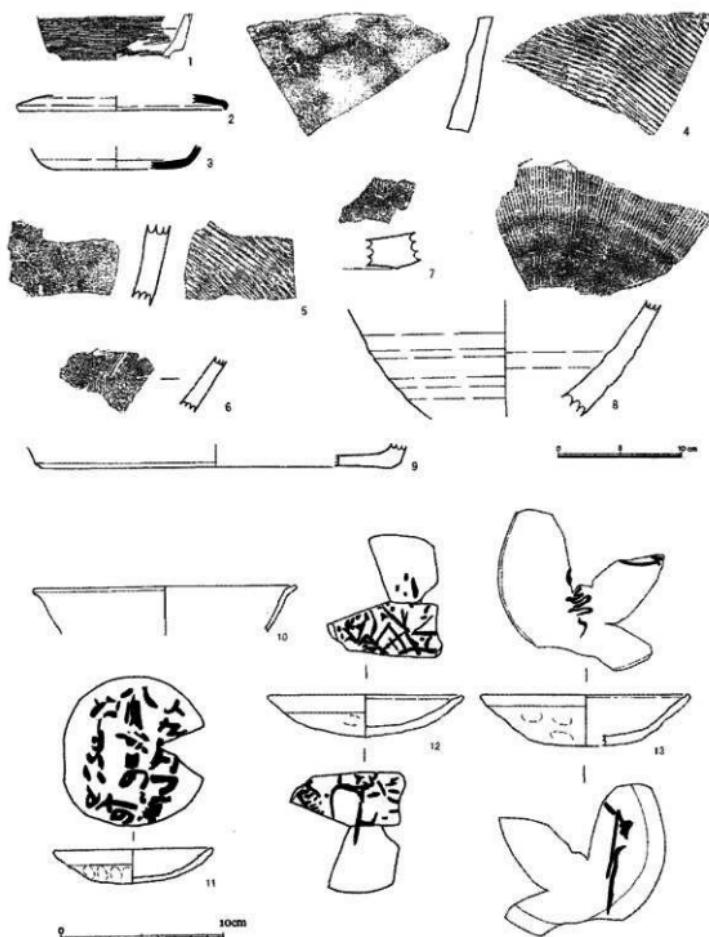


図6 遺物実測図

1~9:1/4、10~13:1/3

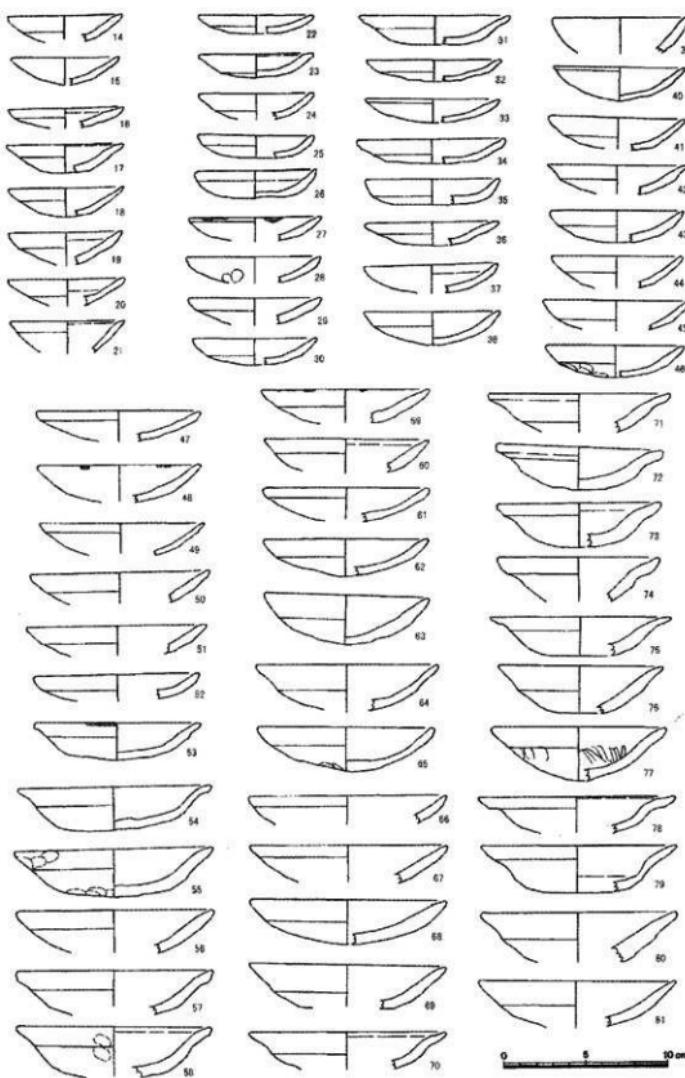


図7 遺物実測図 (1/3)

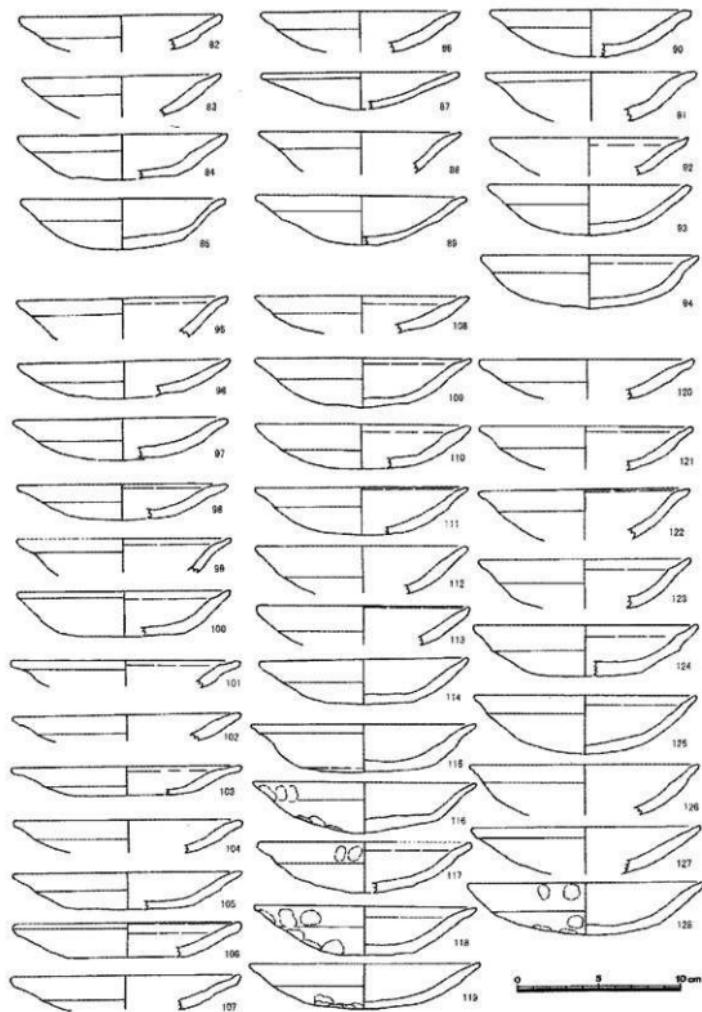
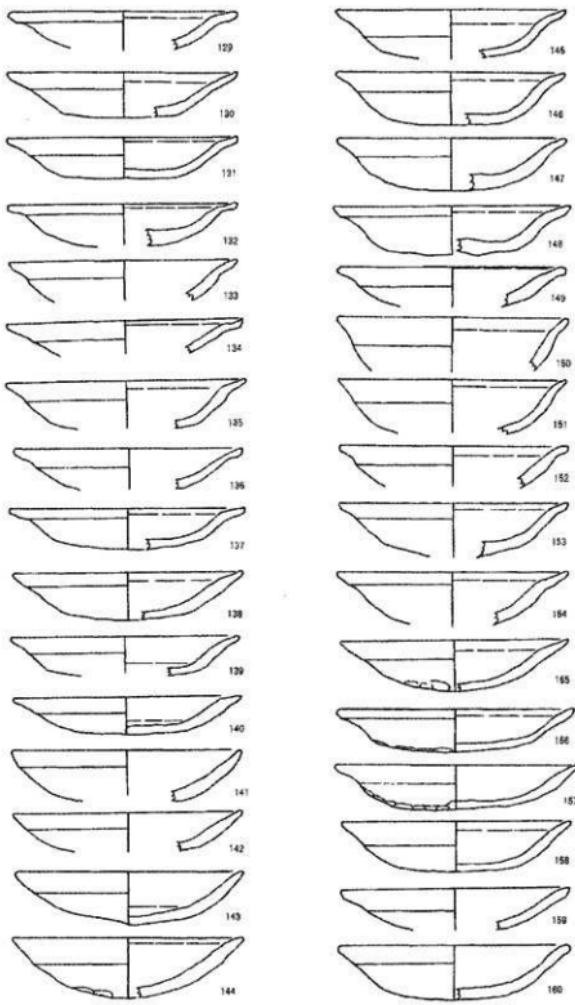


図8 遺物実測図 (1/3)



0 5 10 cm

図9 遺物実測図 (1/3)

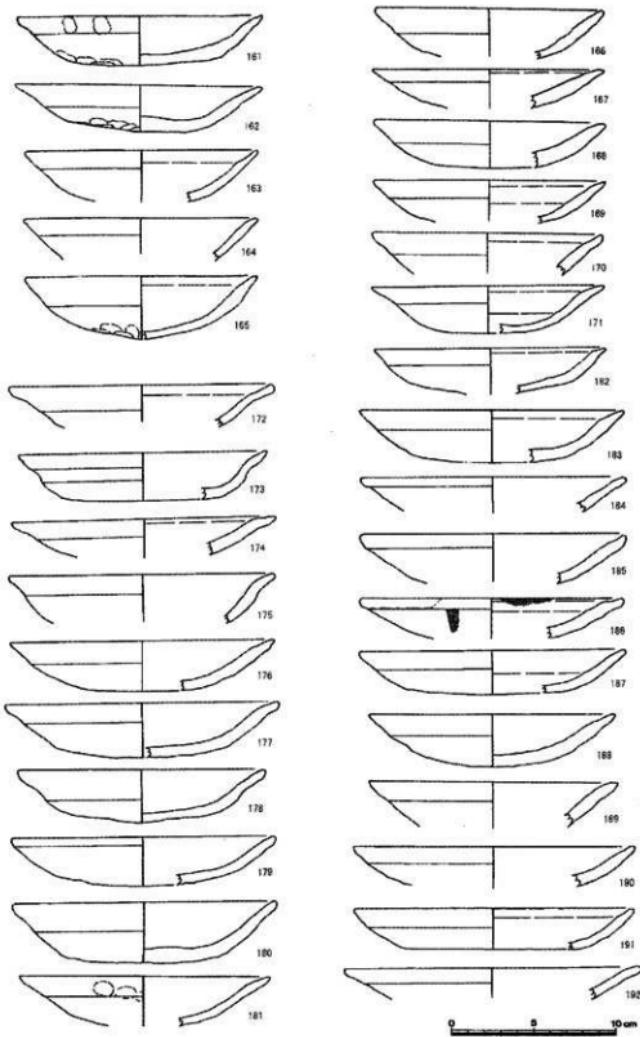


図10 遺物実測図 (1/3)

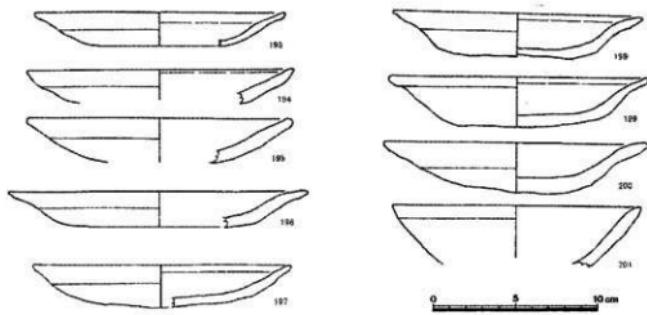


図 11 遺物実測図 (1/3)

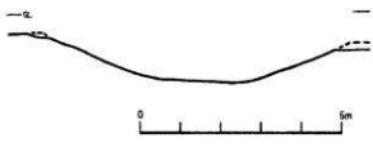


図 13 8T 堀断面図 (推定線)

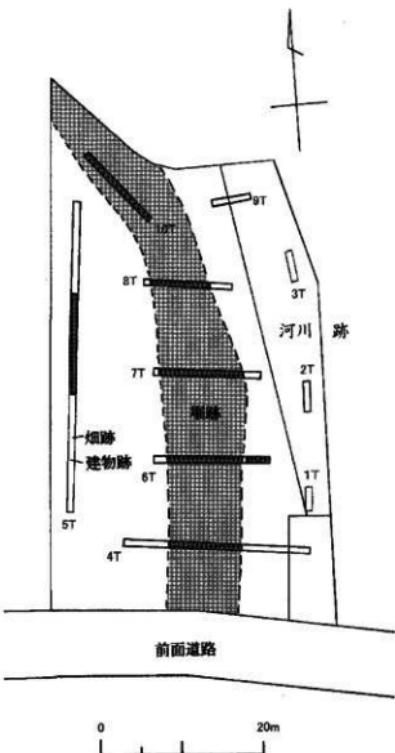


図 12 試掘位置図

2 平成 12 年度調査

(1) 遺構 (図 12・13)

堀跡 SD01 試掘トレレンチ 4・6・8・10Tにおいて、南北方向の堀跡 SD01 を確認した。検出面での堀幅は 7.2m~10.5m である。8T でボーリングにより確認した堀の断面形状は、緩やかな傾斜をもち、堀底で幅約 2m である。また深さは最深部で検出面から 120cm である。この形状は、平成 3 年に検出した堀跡とはやや異なる。堀の覆土は、上部暗褐色土、その下に灰色シルトが厚く堆積し、中にかわらけ・陶磁器・焼土のほか、7T では被熱した礫が複数出土した。遺物は堀底から少し上に浮いたところまで出土しており、この出土状況は平成 3 年に検出した堀跡と近似する。6T においては、堀岸の肩部分に薄い粗砂の流入堆積が見られた。

掘立柱建物 曲輪部分とみられる試掘トレレンチ 5T において、柱穴とみられるピット数基を検出した。径は 20~30cm である。建物規模は不明である。

土坑 曲輪部分とみられる試掘トレレンチ 5T において、径 1m 以上の円形の穴等を確認した。覆土中に礫を含む。性格等は不明。

烟跡 曲輪部分とみられる試掘トレレンチ 5T において北西-南東方向に延びる、一定間隔の溝群を検出した。煙の歟跡とみられる。建物や土坑との先後関係は不明だが、烟跡が新しいとみられる。

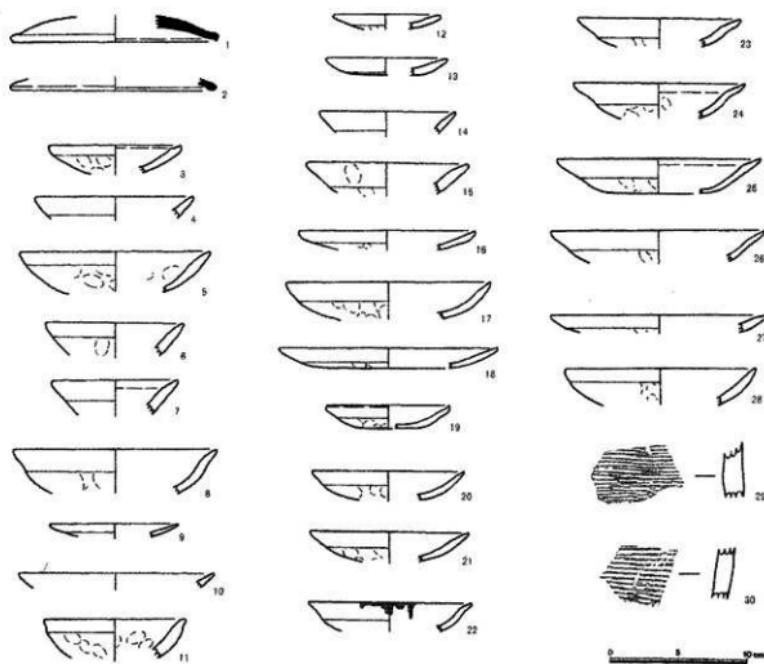


図 14 遺物実測図 (1/3)

(2) 遺物（図14）

古代から戦国期の遺物がある。

①須恵器（1,2）

杯蓋がある。1は、端部が小さく下に突出する。2は端部が四角形状になり、内側に小さな段がつく。10世紀前半頃か。壙内に混入したものとみられる。このほか図示しないが土師器長胴壺体部片がある。

②珠洲（29,30）

壺の体部で、外面に平行タタキ痕がある。29の胎上には海綿骨針を含む。

③かわらけ（3~28）

器形は、口縁部が肥厚し上端面が少しづぼむもの（3,11）と平成3年調査出土区分によるA~D形態があり、前者は宮田編年V期（15世紀後半~16世紀前葉）、後者はVI期（16世紀代）に比定でき、平成3年調査南辺堀出土かわらけと同様の傾向を示す。

灯明皿に転用されたかわらけは、1点のみである。

3~11は壙 SD01 覆土出土、12~30は5T 遺物包含層出土である。

IV 総括

1 太田本郷城跡の比定理由

今回の2次にわたる調査によって、太田本郷城跡の位置がほぼ特定できたと考える。

城跡はかつて刀尾神社・刀尾寺の北側、鰐川沿いに想定されていたが、これまでの発掘調査の結果、調査地点そのものが城郭遺跡の主体部、すなわち戦国期太田本郷城の主郭あるいは副郭（第二郭）の可能性が極めて高くなったといえる。その根拠をいくつか示したい。

(1) 堀の存在 試掘調査で確認した堀の規模は、最大幅10mと広く、居館を取り巻く区画溝より規模が大きい。深さは検出面からは30~120cmときわめて浅いが、これは近世以降の掘削、特に現代の圃場整備工事等により地山が大幅に掘削されたこと、堀内側の土塁が撤去されていること等により、残存部が浅くなつたためと理解される。

これらにより、堀の規模は、戦国期木舟城や頼海寺城などの平城で確認されている堀との同程度の規模が復元され、城郭に伴う堀との理解が可能である。

(2) かわらけのあり方 主に堀から出土した大量のかわらけは、形態等の観察から、16世紀後半の戦国末期に一括して製作・廃棄されたもので、300点以上のかわらけがまとまって廃棄されるといった状況は、通常の集落遺跡ではあまり見られない。また後段で検討するが、墨書きされたかわらけがあり、その内容が吉祥に関連すると考えられることから、戦時における出陣・退去等における祭祀を伴う廃棄行為が推定され、それを行う場としての城郭遺構の存在を示している。

(3) 地割の改変 城郭に限らないものの、戦国期平城の特徴として、①戦略上重要な主幹街道上に城を置き、②敵対する前面に城下町を築造し、③遠見遮断のため街道を屈曲させて城下町に引き入れる、などの構造があることが指摘されている〔高岡1980、古川2002〕。この城郭遺構は、富山と立山を結ぶ主要幹道上に存在しており、地割を改変して築かれている。これについては次項で詳細に検討する。

以上の諸点から、本遺構群は城館遺跡であることを示しており、太田本郷城跡の本体と考えて差し支えない。

2 太田本郷城跡の位置について

太田本郷城跡は、戦国後期における上杉方越中進出の拠点として位置づけられていたことは、これまでの記録を見ても明らかである。このような重要な拠点となりえた理由について、立地条件か

ら検証してみたい。

太田本郷城は、鰐川の右岸沿いに築城された。戦略的な側面から見ると、当時比較的大規模の大きな河川であった鰐川を背後にした後堅固な城郭という地形的特質を想定できる。明治 44 年地形図には川除去手もしくは旧河道とみられる帶状の落ち込みがいくつか表記されており、その痕跡からみて河川敷の最大幅は 100m 以上に及ぶ広いものである。

城は鰐川河川敷からはやや離れた位置に置かれており、暴れ川であったとみられる鰐川はむしろ避けているのであって、河川の影響の少ないやや離れた位置に築いている。これは、後述のように、堀への引水を考慮してもいる。

次に立地状況であるが、鰐川は戦国期富山城及び城下町へと流入しており、富山城側から周辺地域への連絡網としての幹道には、①安定的な平坦地を直線的に通るもの、②河川流路に沿って構築されたものがある。前者は古代以来の条里地割等に沿ったことが推定される。②は地理的条件、すなわち河川両岸に発達した小高い自然堤防を利用するものである。これらを戦国期主要城郭との位置関係をもとに復元したものが図 15 である。太田本郷城の位置は、2 つの幹道の交差する部分に存在することがわかる。一つは鰐川に沿って富山方面から南西方向の上滝・立山方面へ向かうもので、江戸期には富山から立山へ登拵する信仰道であった。絵図には道の名称が書かれたものがない。もう一つは、左岸上流側の布市から太田本郷をへて町新庄へほぼ直線的に抜ける道である。布市は七か寺と呼ばれるように寺院が集合し、その発祥は鎌倉に遡るとされている(『鰐川の郷土史』)。ここから太田本郷、高屋敷、秋吉、町新庄というルートが想定され【久保 2014 ほか】、これは富山を通らずに町新庄から常願寺川左岸沿いに進む江戸期の北陸街道につながるものであるが、その痕跡は江戸以降稀薄となつた。

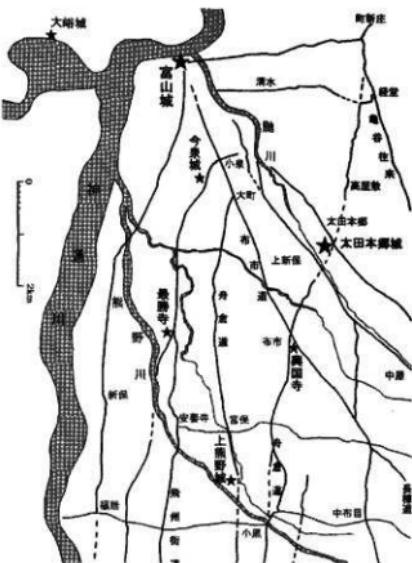


図 15 主要幹道と戦国城郭の位置関係

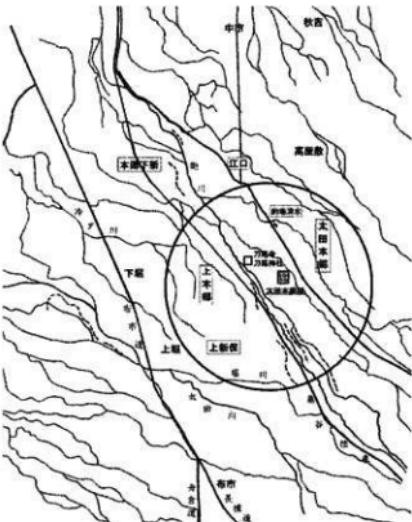


図 16 地名と水利・道路

このような幹道は戦国期城と城を結ぶ軍事上重要なものであり、交通の要衝におかれた太田本郷城の位置もこのような理解が可能である。

一方、太田の地名が示すように、鎌倉以来の太田保の存在については、すでに久保尚文により発生と展開について詳細な研究が行われている〔久保 1983・2008〕。太田保には有力な国人が複数存在し小地域を押させていたことが推定されており、また、北半は太田下郷、南半は太田上郷と区分されてもいる。その中心的な本拠地はどこかという問題は解決していない。本拠地を示す地名として留意したいのは「太田」を冠することもさることながら、「本郷」の地名である。江戸期絵図の表記や村名は「本江」の表記であり、加賀藩富山藩境界が馳川であることから、馳川をはさんで両岸に本江あるいは太田本郷が存在する表示もある。これらのことから、馳川をはさんで両側が一体的に本郷として認識されていたとみられる。

この本郷の名称は、領主らが領内に設けた支配拠点を設け、これを維持するためその周間に設けた村落含めた区域を本郷と呼称するとされる。多くの場合、ここは政治・経済・流通の中核機能をもった。中世後期になり、惣村・郷村が形成され、それらを支配する莊官百姓クラスの国人・土豪らの中心地域を指す地名として用いられた。太田本郷がどの時期の支配拠点であるかは不明であるが、上杉方は一貫して「本郷」と称していることから、当時の認識としてそこが支配拠点として機能または記憶に新しい状況が存在していたことがわかる。このような地域だからこそ、戦国期の拠点的城郭が置かれたことが理解される。

この拠点的地域の範囲については、推定でしかないが、周辺地域に広がるいくつかの地名がその鍵をもつと思われる（図 16）。本郷が拠点であった場合、その入口は本郷口→郷口→「江口」と転化した。馳川左岸には「上本郷」「上新保」がある。新保は新開地をさしている。上新保では大規模な古代集落の形成が見られるほか、13世紀から14世紀を主体とする高級輸入陶磁を持つ集落の存在が確認されており〔富山市教委 2000〕、中世前期における開発を示している。

このような関連地名や発掘成果から、太田本郷の中核的支配区域としては、図 16 円内が推定される。江口を北端入口と想定した場合、南から、太田本郷・江口・中市・石金・西長江・田中裏と至り。江戸期北陸街道と交差する。このルートは南北方向の直線道路となり、交差する地点には富山城包囲のための「向城」の一つ「稻荷砦」の推定地である。

南北直線道路は古代以来の旧幹道の性格が推定され、太田本郷城と稻荷砦という向城同志を結ぶ戦略道として使われたと考えられる。

3 地籍図からみた城館構造

太田本郷城跡の城郭構造については、発掘調査では 2 本の堀とそれによって囲まれた曲輪といった情報しか把握できなかったが、昭和期の圃場整備以前の地割図（図 17）を参考にして城郭構造を復元してみたい。

発掘調査によって確認された遺構を地割図に転写すると、概ねこの遺構（2 本の堀）の方向と一致する地割が周囲に広がっていることが判明する。その範囲は図中薄い網のエリアで、東西 130m 南北 140m である。これに隣接する水路跡（筏川分流、馳川に合流、無名河川）にもこの地割の方向を意識して直角の屈曲を幾度か繰り返している。元来に自然地形による水流方向は、南東から北西方向（N-45°～60°-W）であり、多少の蛇行を想定したとしてもその方向とは異なる。図 17において自然流路位置を復元してみると、図中 A または B 地点がその候補としてあげられる。A 地点は立山道に沿った流れであるから。A-B 地点を通る河道は自然的な蛇行の角度の範囲内であることからそのようにみることもできるが、そうであれば A の後に B 流路へ変化したと思われる。問題は B 地点の下流側である。B 地点から蛇行角度以上に東に屈曲し、その後ほぼ直角に 3 回屈曲している。これは人為的な河道変更を示すと考えられる。この終了地点は河道 A において推定した自然流路への復帰地点 C と重なる。このような屈曲する水路は、曲輪周囲を廻らして水堀として利用したもの



図17 園場整備以前の地割図と太田本郷城構造復元

と考えられる。太田本郷城跡の場合は、その内側にも堀が存在していることから、外堀の役目を担ったと理解される。この外堀の埋郭した範囲は、発掘で検出した堀に埋郭された曲輪 A の東側二小面積と南側の円光寺を含む大きな曲輪 B の部分である。

以上から、太田本郷城跡は、立山道の西側に接して 2 郭以上の構造をもった構造の平城であったことが推定される。

曲輪 B を外郭とした場合、南方に対して防御を固めていると理解される。南方からの脅威としては、元亀 3 年（1572）年舟倉の井上肥後守が 2 度にわたり本城を攻め、上杉方鰐坂長実が本城を守備し、新庄城と太田の「寄居」を堅固にしたとする記録がある。ここでいう寄居がこの城郭遺構であり、堅固にしたというのが南方にある曲輪 B と流路利用外堀の変形整備であったと推定しておきたい。その後天正 6 年には織田方についた八尾城主城の齊藤新五が南から攻め込んでおり、南方にたいする防備が強力になされる必要があった。

なお、城郭の北側隣接地には刀尾神社・別当寺刀尾寺へ向う参道が立山道から西へ延びている。この参道沿いに門前町が存在した可能性が指摘されているところであるが、道の両側には矩形地割が発達しており、門前町の可能性を示唆するが明確ではない。この参道の北側には太田本郷城跡

と同方向の地割が見られ、またその一部は堀または土堤を示唆する細長い地割であることから、別の曲輪の存在あるいは城下町や家臣集住地等の区画が存在する可能性があることを指摘しておく。本城と立山信仰の一拠点刀尾神社との関係については明確な資料がなく不明である。本城がなぜ刀尾神社に隣接して設置されたか、解明は今後の課題としたい。

4 墓書かわらけについて

図 6-11 のかわらけには、中央に「八月卅日の」とあり、日付が記されている。その周囲には漢字かな混じり文で 11 文字程度があり、解読が困難である。ここでは可能な限り解読を試みたい。

(1) 広田克昭による解説

広田克昭氏（故人）が 1996 年に提示した翻刻は以下である。

「人々同門賛（畏し）ミテ 八月卅日荷（に） 婦（ふ）しまい被ル可シ」

同門（同じ門徒宗）の方々は、必ずや 8 月 30 日に参られるようにという參集の依頼か？

(2) 解説試案

1 字目の「人」、「八月卅日の」、ひらがなの「しまい」以外は不確定である。

右行 「ト九月つ黄」／ 中央行 「八月卅日の 可」／ 左行 「得しまいぬ」

全体的にみると、文章は 3 行で構成されているように見えるが、以下に詳細を検討する。

右行の「ト九月つ黄」の一文は一直線に書かれており、続きの文であることがわかる。

中央に書かれた「八月卅日の」も一直線に書かれており、一続きであることがわかる。しかしその下の「可」の文字は、「の」との間に 1 字分の空白があり、「八月卅日の」の文の一直線の延長上ではなく、左にずれている。このことから、「可」は「八月卅日の」の分とは切り離して考えられる。

左行の「得しまいぬ」の一文はやはり一直線に書かれており、一続きの文である。

このようにみると、外見上 3 行に見えるこの文章は、4 つのブロックからなるといえる。

それを再度組み直してみると、

右行 「ト九月つ黄」／ 中央行 「八月卅日の」／ 中央下左 「可」／ 左行 「得しまいぬ」

または「めしまいぬ」

となる。この場合右行から順に読むことが通例であるが、「可」1 文字の置くべき位置関係が不明のため、この文の解説を困難にしている。

ここで、各文の位置関係をみると、「八月卅日の」の文がちょうど皿中央に位置し、重要な位置を占めている。そしてその他の文字が左右に振り分けられ、末尾の 3 文字はきちんと接していく関連性をもつような配置となっているようみえる。この場合に考えられる「可」の位置としては、「ト九月つ黄」の次にくるべきところ左にはみ出したと理解し「ト九月つ黄可」とする考え方と、「得（め）しまいぬ」の文末に来るべきところ 1 字不足し右側に統けて「得（め）しまいぬ可」となる。

以上により考えられる文章の流れとしては以下の 2 つを想定する。

A 「八月卅日の ト九月つ黄可得しまいぬ」

B 「八月卅日の ト九月つ黄めしまいぬ可」

共通する「八月卅日の」は、「はづきみそかの」である。7 音であるから、韻を踏んだ文章の可能性がある。次に「ト九月」は「ぼくくがつ」「ぼくながつき」「うらないぐがつ」「うらないながつき」と読めるが、5 音または 7 音の韻を踏むとすれば「ぼくくがつ」または「うらないくがつ」と続くとみられる。文の途中であれば 7・7 より 7・5 となり、「ぼくくがつ」のほうが韻が踏みやすい。最後は「可」の位置の問題で、A では「つきかえしまいぬ」、B では「つきめしまいぬか」となる。

次に文意からみると、前段は、「（旧暦）8 月（葉月）晦日の」という頭文である。「ト九月」は「占いを行なう、（旧暦）9 月（長月）」と続く。この意味として「8 月末日に占いを行なったところ、9 月に」とみられる。この文に A 文が続くとすると、A 文は「月替えしまいぬ」と読み、「月が

替わってしまった」の意味となる。一方B文は「継き目しまいぬか」と読め、「代替わり（家督などの相続、跡継ぎ）をしたものか」という意味となる。

全体としてみると、A文の場合は、「8月晦日に占ってみたが、すぐ9月になって月が替わってしまった。（占っても意味がなかったことだ）」という叙情的な意味合いになり、B文の場合は「8月晦日に占ってみたところ、9月に跡継ぎをするということになったのだが、そうしたものだろうか。」というやや現実的な内容の文が考えられる。

文意の面からはA・Bいずれの内容も成立すると考えられる。

(3) 文字の示す意味

戦国期には、合戦前に連歌会を開き、その連歌を神前に奉納して出陣すれば、戦いで勝つという一種の戦勝祈願に関する信仰があり、出陣連歌を催して効用を求めてのめりこんでいった。武将の多くは、戦いにあたって神仏の加護を求め、易占によって運勢の吉凶を見定めて行動するパターンが多くかった。上杉家では上杉景勝の執政であった直江兼続が安国寺住持であった清源寺は鑑に合戦の日時・吉凶を占わせており、お抱えの呪術者がいたことが明らかにされている〔小和田 1998〕。

このような事例からみて、太田本郷城跡壇に廃棄された墨書き土器は、天正年間頃の上杉陣営出行われた吉凶占い等に関連するものかもしれない。

(4) 履からみた「八月卅日」

さて、墨書きにみられる日付け「八月卅日」について検討する。

このかわらけの年代である16世紀後半においてわが国で使用されていた暦は、太陰暦に基づく長慶宣命暦である。長慶宣命暦は、貞観3(861)年から貞享元(1684)年まで使用された暦で、陰陽寮を司る賀茂氏が作暦したとされる。陰陽寮が定める暦は具注暦と呼ばれ、暦注と呼ばれる季節や吉凶などの言葉が記入された。

太陰暦においては、大の月と小の月が存在し、調整のため閏月が入ることもある。大の月と小の月の大きな相違は、基本的に、大の月は晦日が30日であるのに対し、小の月の晦日は29日となる。そして、大の月と小の月の該当月は年によって異なっている。

高野英明による旧暦計算^{注1}を用いて、太田本郷城が記録に現れる元亀3年から天正6年までにおいて、8月が大の月である（即ち晦日が30日である）年を確認すると、8月大の月となる年は、元亀3、天正元、天正2、天正3年となり、暦の上では、織田方（斎藤新五）が拠る天正6年以前の上杉方の時代に該当すると考えられる。

このほか、今まで知られる太田本郷城に関わる記録の中に、8月30日という日時に関する歴史事項は見出すことはできない。このため、8月30日そのものに何か意味があるのかもしれない。

井上江花が著した「越中に於ける伝説と口碑」〔井上 1937〕に次の伝承が掲載されている。

「卅日の間に月影 大彦命、北陸道巡視の所、上新川郡岡野を過ぎける頃は、八月卅日にて、行先分り難く廣野に駒を立て、四方を窺ふに、幽かに月影のうつらふを認め、之れを知るべに進めば、民家二軒あり。其の傍に清水の映りたりけり。命之れに口をうるほし、月見の池と名づけられしかば、後世、宮を立てて月岡神社と称せり。」

月岡神社は、現在の月岡壇ノ山の東部に所在する月読社である。この月読社について考察した藤田富士夫によれば、月読社には月影を映したという「月見の池」（「月の清水」ともいう）と桂の木が存在した。太田本郷城に近接する「的場の清水」にもかつて桂の大木があつて、清水は夜毎の月を宿し万病に驗ありという伝承が残る。これら桂・月・聖水の信仰の残る土地は、中国の神仙思想に基づく不老長寿の理想郷とされたのではないかとされた〔藤田 1987〕。

以上に述べた土地が何らかの形で太田本郷城との関わりを示していることが注目される。

5 城史

太田本郷城跡は、安土桃山時代、上杉謙信方の武将河田長親が一向一揆に備え、元亀3年（1572）ここに陣をはり、翌年「向城」を築いたとの記録があり、これが実質的な城の始まりと思われる。

天正6年（1578）、織田信長方の武将斎藤新五らが飛騨方面から攻め込み、河田長親らが撤退した後ここに居城した。そして北西3kmの今泉城にいる河田長親・椎名小四郎らの上杉勢を攻め、勝利したという。

付近には斎藤新五のゆかりの地がいくつか残されている。城跡の一角にある円光寺は斎藤新五の菩提寺と伝えられ、大永3年（1523）年当地に建立したとする〔『太田郷上史』〕。また、新五の娘が病をなおした靈泉と伝える的場の清水がある〔井上1937〕。「的場」は城館施設を示す名称で、弓の練習場のことをさす。的場は城内に設けることが多い〔小和田2002〕。太田本郷城の北東にある「的場の清水」は、復元した城の位置とやや離れており、城内とは考えにくく、城外に設けられた的場に近接して存在したものか。

年号	歴史事項	出典
	越川氏（親當）の居城と伝える	
永正12（1515）	越後衆（長尾為景）が太田保が乱し、文殊寺で防戦した太田保国人上野彦次郎に細川高国が感謝する	
永正16（1519）	長尾為景による神保慶宗討伐の際に、細川高国は長尾、嵐山尚順方と結び、上原左衛門大夫を太田保に入れる	
永正17（1520）	神保慶宗が太田保に陣を置き、新庄城の長尾為景を攻撃し、敗れる	
大治3（1523）	浄土真宗円光寺、昌了開基	
元亀3（1572）	舟倉の井上肥後守、太田保に2度攻込む 上杉方新庄城守鰐坂長実がこれを撃退 新庄城・太田の寄居を堅固にし油断なきようにした 河田長親・吉佐（吉江織部佐忠成）が付添って太田之内本郷に陣を置く 5月 鰐坂長実 鉄砲の丸薬・煙硝・鉛不足につき補充を要請	上杉家文書
元亀4（1573）	上杉謙信・富山城の一一向一揆勢を攻めるため、稻荷・岩瀬・本郷・二宮・押上に向城を築く	
天正元（1573）	上杉力河田長親に太田下郷が料所として与えられる（太田上郷は村田秀頼へ）	
天正6（1578）	10月 斎藤新吾・太田保内本郷に陣を張り、今和泉城の上杉方河田長親・椎名小五郎を攻める 斎藤、上杉を月岡野で迎え撃ち、360の首級をあげ神保長住へ渡す 信長、河田の討伐を指令し、援軍を出す 上杉景勝と斎藤新吾が荒川に戦い、太田本郷城に入って景勝を攻める 12月 信長、椎名駿河守に太田保を与える	斎藤文書 信長公記
応仁～天正年中	願海寺城主寺崎盛永の姉の子石崎平馬、本郷村に住む。盛永・子喜六郎。石崎の3人で一向一揆を扇動	

注

- 1 旧暦計算サンプルスクリプト/H.Takano(C)1993,1994による

参考文献

- 井上忠雄 1937 「越中に於ける伝説と口碑」『越中史片影』江花叢書第15巻 江花会
- 太田郷土史編纂委員会編 1987 『太田郷土史』
- 大山の歴史編集委員会編 1990 『大山の歴史』
- 小和田哲男 1998 『呪術と占星の戦国史』新潮選書 新潮社
- 小和田哲男 2002 「地名・地籍図による城館跡の復原」『小和田哲男著作集』第6巻 清文堂
- 久保尚文 1983 『越中中世史の研究』桂書房
- 久保尚文 2008 『越中富山 山野川湊の中世史』桂書房
- 久保尚文 2012 「越中一向一揆と太田保」『我聞如是』第11号 富山仏教学会
- 久保尚文 2014 「京都東岩藏寺と富山郷—越中地域史研究の原点@—」『富山史壇』第174号 越中史壇会
- 塙 照夫 1972 『越中の古城』北国出版社
- 島原義三郎・中川達編 2004 『越川の記憶』桂書房
- 高岡 徹 1976 「織田氏の越中進出と斎藤新五郎の軌跡」『富山史壇』第64号 越中史壇会
- 高岡 徹 1980 「太田本郷城」『日本城郭体系』
- 高岡 徹 1993 「戦国期上杉支城の復元研究—越中今泉城をめぐる戦国史—」『富山市日本海文化研究所紀要』第6号
- 富田景周 1933 『越登賀三州志』(日置謙校訂 石川県図書館協会)
- 富山県教育委員会編 1970 『立山文化遺跡調査報告書』
- 富山県郷土史会校注 1974 『肯構泉達録』KNB興産株式会社
- 富山県編 1975 『富山県史』史料編II 中世
- 富山県編 1984 『富山県史』通史編II 中世
- 富山県埋蔵文化財センター編 2006 「太田本郷城」『富山県中世城館遺跡総合調査報告書』
- 富山市考古資料館 1992 「富山市太田本郷城跡出土の墨書き小皿」『富山市考古資料館報』No.22
- 富山市教育委員会 2000 『富山市上新保遺跡発掘調査報告』
- 富山市教育委員会 2009a 『富山市上新保遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2009b 『富山市上新保遺跡発掘調査報告書』
- 富山市史編修委員会編 1960 『富山市史』第1巻
- 富山市史編さん委員会編 1987 『富山市史』通史 上巻
- 鰐川校下史編纂委員会 1968 『鰐川の郷土史』
- 野島好二 1958 『越中新風上記』中田書店
- 藤田富士夫 1987 「柱・月・聖水の信仰について」『社交』133号 富山社交俱楽部
- 古川知明 1992 「富山市の遺跡2 太田本郷城跡」『富山市考古資料館報』No.22
- 古川知明 2007 「鰐川と富山城下町一絵図からみた近世前期の河道復元—」『富山史壇』第152号 越中史壇会
- 古川知明 2014 『富山城の縄張と城下町の構造』桂書房
- 宮田進一 1997 「越中国における土師器の編年」『中・近世の北陸』桂書房
- 森 隆 2003 「富山県の中世上器(資料編)一県東部・富山平野を中心とした地域における一」『富山考古学研究 紀要』第6号 財団法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所
- 森 隆 2005 「4 中名V・VI遺跡出土の中世上器:陶磁器資料」『中名V・VI遺跡、砂子田I遺跡発掘調査報告』財団法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所
- 森田祐圓 1973 『越中史徵』(石川県図書館協会編 復刻版 富山新聞社)
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館



太田本郷城跡 石標・案内板



平成3年調査区（西から）



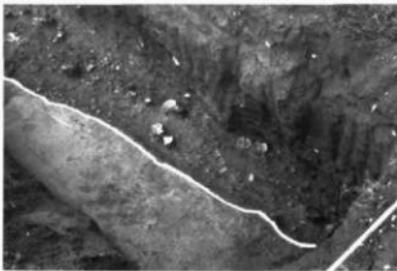
遺構完掘（東から）



遺構完掘状況（西から）



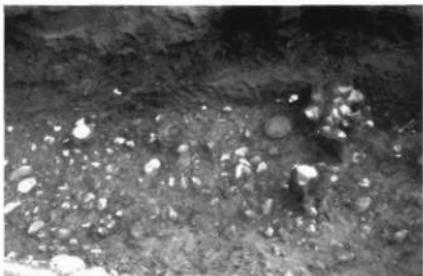
遺構完掘状況（東から）



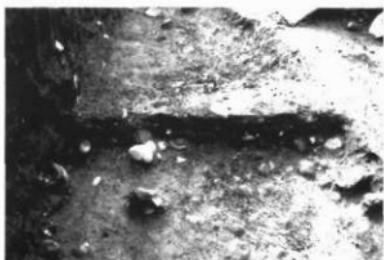
遺物出土状況（北西から）



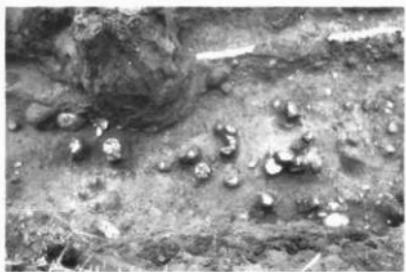
遺物出土状況（北東から）



遺物出土状況（北から）



堀 横断面（A-A'）



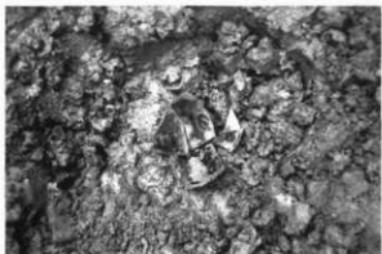
遺物出土状況（北から）



堀 横断面（B-B'）



堀 横断面（C-C'）



文字墨書土器出土状況



工事後（東から）



墨書かわらけ（図 6-11）



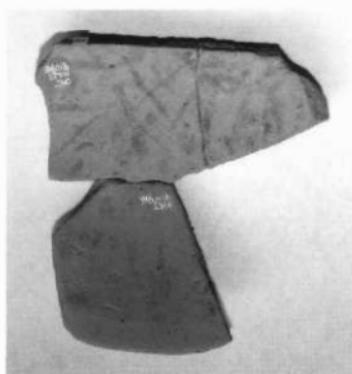
赤外撮影



画像処理



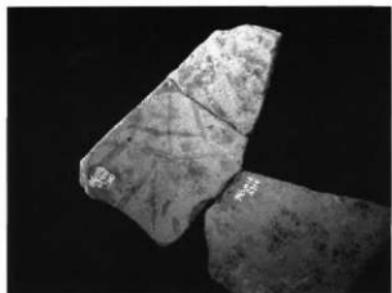
赤外撮影（部分）



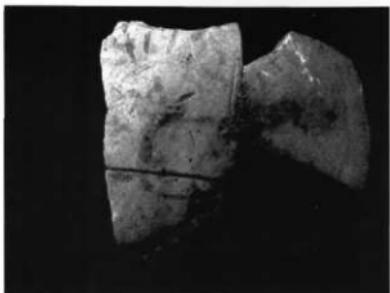
墨書かわらけ（図 6-12）内面



同左 外面



画像処理（図 6-12）内面



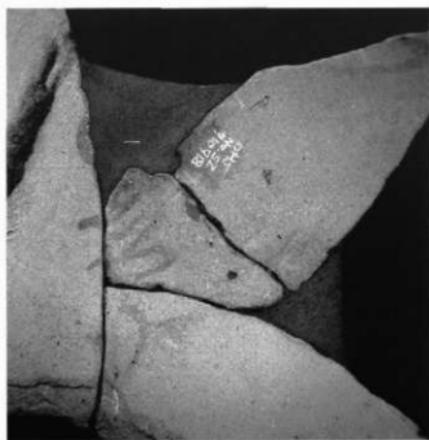
画像処理（図 6-12）外面



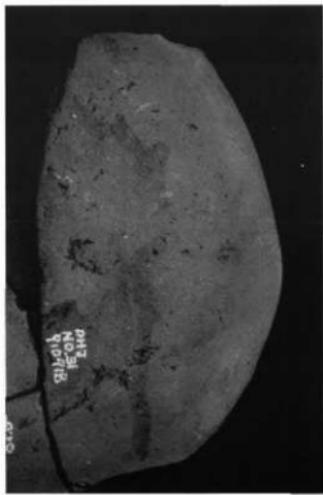
赤外撮影（図 6-12）内面



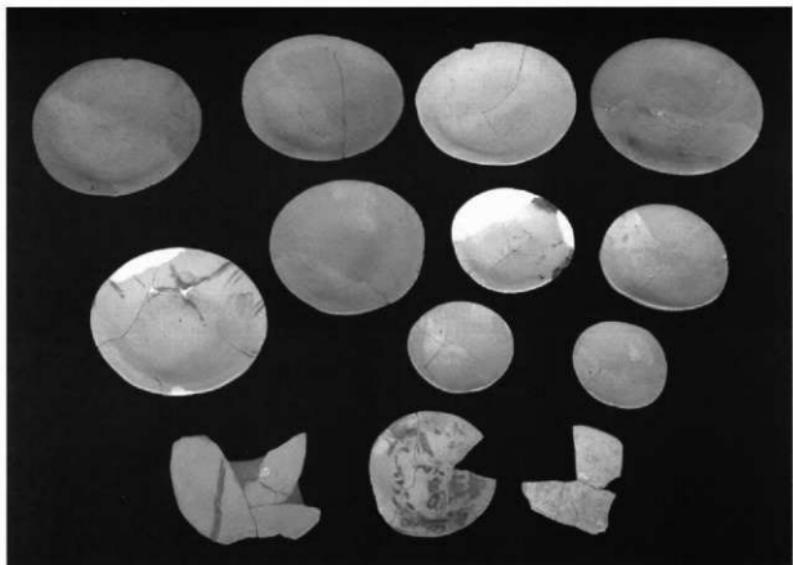
赤外撮影（図 6-13）内面(部分)



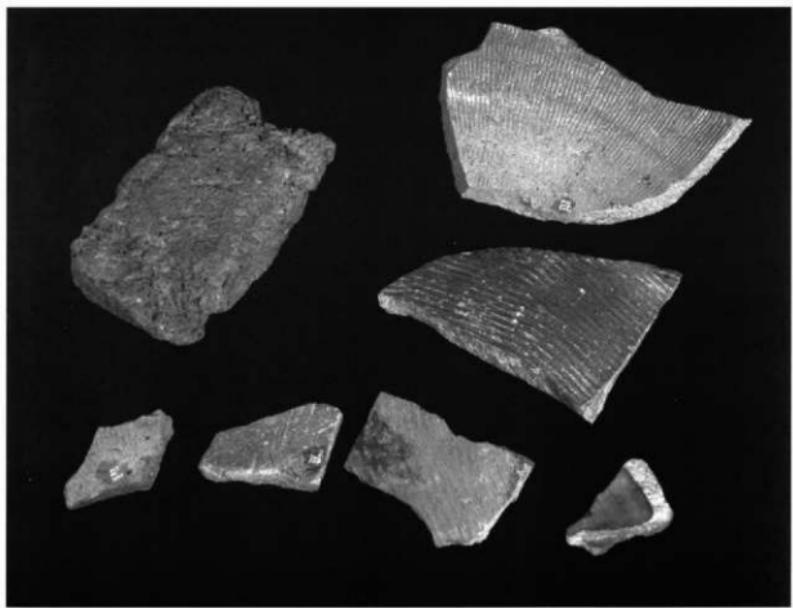
画像処理（図 6-13）内面



同左 外面(部分)



戦国期かわらけ



珠洲・煉瓦



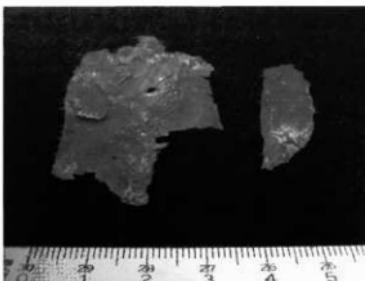
煉瓦内混入物（草破片）

煉瓦 (図 11-202)

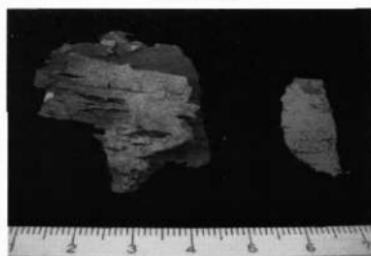


珠洲 漆繕ぎ 図 6-4

同左 (部分)



漆膜 (外面)



漆膜 (内面)



漆膜裏面付着木質部



12年度試掘調査区 全景（南西から）



4T 堀跡 SD01 検出状況



4T 堀跡 SD01



5T 番跡等検出状況



5T 挖立柱建物跡・土坑検出状況



5T 造構検出状況（南から）



試掘遺物

II 千石町地内埋没樹木群

1 経緯

この埋没樹木群は、富山市千石町4丁目5番1において実施された千石町遺跡試掘調査の実施後、施設建築工事に先立ち、地質調査を行った際に発見されたものである。

千石町遺跡（2010444）は、縄文・古代・中世・近世の集落跡であり、当該地における老人福祉施設建築計画に伴い、平成25年7月に試掘調査を実施した。調査の結果、地表下1.5mまでは近代の擾乱のため、遺構は残存していないかった。

このため工事は予定どおり進められ、平成26年5月地質調査のボーリング中に、地下約6mに樹木と思われる木片を確認した。障害物とみられたため掘削を行ったところ、樹木数本が出土した。

この情報が工事主体者から当埋蔵文化財センターにもたらされたため、現地確認を行ったところ、自然木であることを確認した。引き揚げのための掘削孔は埋め戻され、出土当時の写真も残っていないため、当時の状況の聞き取り及び引き揚げ箇所周辺の観察を行ったが、この自然木の成因や年代の手がかりになる情報は得られなかった。

工事主体者からは、この自然木の種類や年代を知りたいとの依頼を受け、パリノ・サーヴェイ株式会社に樹種同定及び年代測定の分析を依頼した。本書ではその成果を掲載した（III章）。

パリノ・サーヴェイによる現地における試料採取作業を経て、平成26年7月に分析結果が報告され、樹種はコナラ属・クリであること、年代は2,300年前の弥生中期であることが判明した。

7月30日魚津市埋没林博物館麻柄一志館長の現地視察を得た。

成果は、工事主体者の承認を得て、平成26年8月8日埋蔵文化財センターからマスコミに公開した。発表では当初埋没林と呼称する予定であったが、パリノ・サーヴェイ及び情報提供した富山市科学博物館から、埋没林とは立木がそのまま外的の営力により埋没した状況をさすので、本例は厳密な定義では埋没林とは分類できないとする指摘を受けて、埋没樹木群と呼称することに変更した。

この発表を受け、魚津市埋没林博物館、富山大学柏木健司研究室、福島大学共生システム理工学類木村勝彦研究室から、試料提供の依頼がなされた。工事主体者の承認を得て、コナラ属1本とクリ1本の輪切り試料を作成し提供することとなった。

9月25日この輪切り作業を工事主体者において行い、埋蔵文化財センター・富山大学柏木健司准教授が立ち合った。後日輪切り資料が各機関に提供された。

2 埋没樹木群の概要

地下から掘り出された樹木群は、

- 1 直径93cm、長さ9m 根付近を含む
- 2 直径90cm、長さ4m 幹部



図1 埋没樹木出土地(★)

3 その他径 40cm の小片多數、がある。

これらについて、放射性炭素年代測定 (AMS) 及び樹種同定を行った。

分析の結果、約 2,300 年前の弥生時代中期に死滅したブナ科の落葉広葉樹、クリ・コナラ属である（詳細はⅢ章参照）。現認できた数量は、クリ 4 本、コナラ属 2 本である。

死滅した理由は、河川の洪水によるものと推測される。地下約 6m には河川に由来する礫層があり、樹木には砂が付着していることからみて、礫を大量に含む洪水が約 2,300 年前発生し、一気に樹木群を押し倒したとみられる。樹木群がその場に生育していたか、やや上流側にあって流されたかは不明だが、根が比較的良好に残ることから、大きく離れた位置ではないと推定される。

樹木群のコナラ属 1 本は、年輪の数から、樹齢約 150 年の時点での洪水にのみ死滅した。

3 埋没樹木群の意義

富山城内の発掘では、平安時代以前に洪水が発生したことがわかつていて、今回の発見で、その洪水の年代が 2,300 年前と特定することができた。

この洪水堆積層は、地下約 6m にあり、江戸時代の城下町の生活面（地下約 50cm）まで、1,900 年余りに 5m 以上も堆積した。

富山城では平安時代（1200 年前）以降、神通川洪水をうけながらも城郭として安定的に利用された。今回出土は江戸時代城下町南端にあたり、そこでの利用は室町時代頃（約 600 年前）以降で、やや遅れる。

また周辺における試掘調査等の結果では、江戸時代の厚い洪水堆積層も見つかっている。それらの結果を総括して流路痕跡及び居住に供された高台部の構造を復元したものが第 2 図である。流路は南北から北東方向へ進んでおり、その上流方向に所在する神通川の影響が大きいことを示唆する。

以上により、江戸期から現在の生活基盤は、埋没洪水層の上に成り立っていることが判明した。

この試料は、北陸における数少ない年輪酸素同位体比による年輪年代の基準資料となりうるため、今後分析が進められる予定である。



図 2 旧地形復元図



埋没樹木の切断断面

（コナラ属、年輪により樹齢約 150 年と判明、

AMS 試料採取位置は表皮付近）

III 千石町地内埋没樹木群の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

高橋 敦 千葉博俊

はじめに

富山市千石町4丁目地内では、建造物建設予定地の地質調査の際、地中より多数の樹木（以下、埋没林）が確認されている。本報告では、これらの樹木群の生育した年代や樹種に関する資料の作成を目的として、放射性炭素年代測定および樹種同定を実施した。

1. 試料

埋没林とされる樹木群は、現地表下約6mからの出土とされる。詳細な出土層位は不明であるが、本地点のボーリング調査に基づく地質断面図（図1）や、取上げられた樹木表面に付着する土砂が砂（細粒砂～シルト質砂）を主体とする状況などから、おそらくAS3、AG2、AS4層までの地層が出土層位と推定される。

これらの樹木群は、幹径が大きい樹木や木端様の破片など複数からなる。今回の分析では、これらのうち最も大きい樹木（No1）と、それに次いで大きい樹木5個体（No2～5）より木片を採取している（図版1-3）。なお、No1については、樹種同定の対象としたほか、樹齢（年輪数）の確認や放射性炭素年代測定の対象とするため、樹芯から最外年輪を含む破片と最外年輪を含む破片を採取している。また、採取した木片については、当初2試料を分析対象としたが、現地での試料採取時の観察から同一種が多いと確認できたため、全点について樹種を明らかとしている。

2. 分析方法

（1）放射性炭素年代測定

土壤や根などの目的物と異なる年代を持つものが試料に付着している場合、これらをビンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HClによる炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOHによる腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理）。試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（II）と銀浴（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500°C（30分）850°C（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用して、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650°Cで10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシユウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いてδ¹³Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1,950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma:68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0.1（Copyright 1986-2014 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期5,730±40年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算や再検討に対応するため、

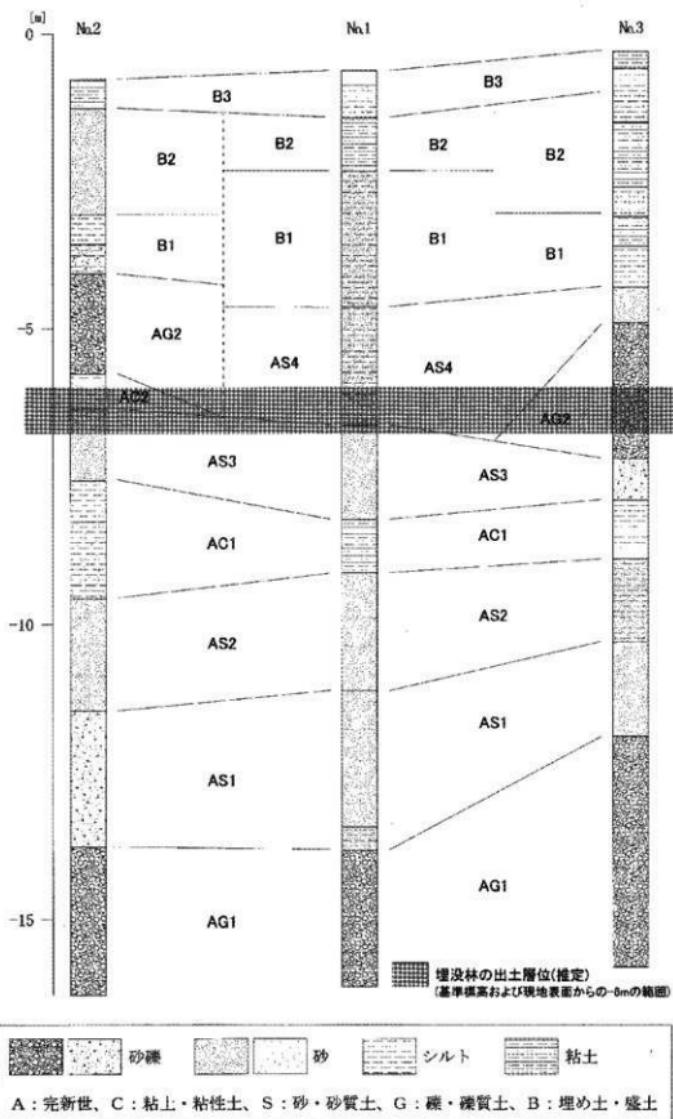


図1. 調査地点の地質断面図(富山市提供資料より引用・加工)

曆年1年単位で表している。

曆年較正結果は、測定誤差 σ 、 2σ (σ は統計的に真の値が 68.3%、 2σ は真の値が 95.4% の確率で存在する範囲) 双方の値を示す。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

(2) 樹種同定

各試料より鋸で切り出した木片を蒸留水中に浸して水分を浸透させた後、剃刀を用いて木片から木口（横断面）・柵目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の徒手切片を採取する。切片をガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）や Wheeler 他（1998）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

№1 より採取した木片の同位体効果による補正を行った測定年代（補正年代）は $2,250 \pm 20$ yrBP である。また、曆年較正結果（ 1σ ）は calBC 384 - calBC 235 である（表 1、図 2）。

表1. 放射性炭素年代測定および曆年較正結果

試料	真年代 (yrBP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正年代 (曆年較正用) (yrBP)	曆年較正結果				相対比 σ (‰)	測定機関 Code No.
				σ	cal BC 384 - cal BC 235	cal BP 2,333 - 2,306	0.487		
№1 木口（シナ材）	2,250±20	-26.52±0.25	2,254±21	σ	cal BC 283 - cal BC 256	cal BP 2,232 - 2,205	0.394		
				2σ	cal BC 246 - cal BC 235	cal BP 2,195 - 2,184	0.119		IAAA-140231
					cal BC 392 - cal BC 351	cal BP 2,311 - 2,306	0.109		
					cal BC 299 - cal BC 227	cal BP 2,248 - 2,176	0.656		
					cal BC 224 - cal BC 210	cal BP 2,173 - 2,159	0.036		

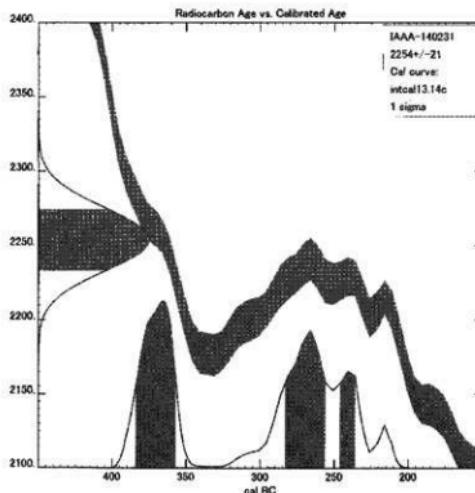


図2. 曆年較正結果(1σ)

(2) 樹種同定

同定結果を表2に示す。No1～6は、広葉樹2分類群（コナラ属コナラ亜属コナラ節、クリ）に同定された。以下に、同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

- ・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圈部は1・3列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1・20細胞高のものと複合放射組織がある。

- ・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圈部は3・4列、孔圈外で急激に径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1・15細胞高。

表2. 樹種同定結果

試料 No.	形状	幹径(cm)*	樹幹 (残存)長 (m)	樹齡 (年輪数)	樹種 (分類群)	備考
1	芯持丸木	93×79	8.9	>146	コナラ属コナラ亜属コナラ節	放射性炭素年代測定試料
2	—	(45)	3.9	—	クリ	
3	—	(45)	2.9	—	クリ	
4	—	最大幅90cm	4.2	—	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
5	—	(>40)	2.8	—	クリ	
6	—	(>24)	2.3	—	クリ	

*括弧内の数値は半径を示す。

4. 考察

富山市千石町4丁目地内の地表下約6mより出土した樹木群のうち、最大の樹木(No1)は、幹径93cm×79cm、樹幹(残存)長8.9m、樹齢はおよそ150年であることが確認された。この他の樹木も半径が24～45cm程度あることから、幹径が比較的大きい樹木であったことが推定される。また、No1は、形状から一方の端部が根に近い部分と考えられ、もう一方の端部(樹木の上側)には枝分かれなどの特徴が観察されなかった。このように樹冠に相当する部分が認められないことや上述した樹幹(残存)長などを考慮すると、本来の樹高は少なくとも9m以上と想定される。さらに、No1のほぼ最外年輪に相当する部位(2～3年分)を対象とした放射性炭素年代に基づく較正暦年代は紀元前4世紀後半から紀元前3世紀前半頃であった。この較正暦年代は、小林(2009)を参考にすると、弥生時代中期前半頃に相当する。

次に、埋没林に確認された樹種についてみると、落葉高木のコナラ節とクリの2種類が認められた。コナラ節は、国内にはコナラ、ミズナラ、カシワ、ナラガシワの4種があり、二次林や山地の落葉広葉樹林などに生育する。クリは、二次林などに生育する。

富山県内では、入善沖の海底林や魚津の埋没林などが著名であり、藤井・奈須(1988)などにより詳細が明らかとされている。富山市域では、神通川河口や四方打山浜沖において埋没林が認められている。神通川河口や四方の埋没林については、木越・藤井(1965)を参考とすると、のべ15種類の樹種が確認されており、冷温帶林や河畔林を構成する落葉広葉樹、温帶性針葉樹および富山県の沿岸地に見られる暖温帶性常緑広葉樹林の構成種(シラカシ、スダジイ、タブノキ、ヤブツバキ)などからなる。千石町より出土した

樹木群に認められた樹種は上記した埋没林などでも確認されているが、その構成は単調と言える。

また、上述した埋没林(海底林を含む)の立地についてみると、いずれも現在の河川河口域や沿岸

表3. 富山市域の埋没林における樹種構成との比較

分類群(和名)	学名 ¹⁾	神通川河口II 埋没林	四方 埋没林	芝草 埋没林	富山市 千石町 (今岡)
針葉樹					
アカマツ	<i>Pinus densiflora</i>		●	●	
スギ	<i>Cryptomeria japonica</i>				
広葉樹					
オニグルミ	<i>Juglans mandshurica var. sachalinensis</i>		●		
ヤナギ属	<i>Salix</i> sp.		●		
ブナ	<i>Fagus crenata</i>		●		
コナラ	<i>Quercus serrata</i>		●		
コナラ属、コナラ属、コナラ属	<i>Quercus subgen. Quercus sect. Prinus</i>		●		
シラカシ	<i>Quercus myrsinifolia</i>		●		
クリ	<i>Castanea crenata</i>	●	●		
スダジイ	<i>Castanopsis sieboldiana</i>		●		
ケヤキ	<i>Zelkova serrata</i>	●	●		
ヤマガラ	<i>Morus bombycis</i>		●		
タブノキ	<i>Machilus thunbergii</i>		●		
ヤブツバキ	<i>Camellia japonica</i>		●		
イスエンジ	<i>Macknia amurensis</i>	●	●		
ケンボナシ	<i>Hovenia dulcis</i>		●		
エゴノキ	<i>Styrax japonica</i>		●		
放射性炭素年代(BP) ⁵⁾		1950±90 ⁶⁾	2730±90	610±100	2250±20

* 神通川河口II、四方および芝草埋没林については、本越・藤井(1965)を参考とした。

1) 学名は現在使用されているものに統一した。

2) 草島新村の北にある古川。(古川、2005)

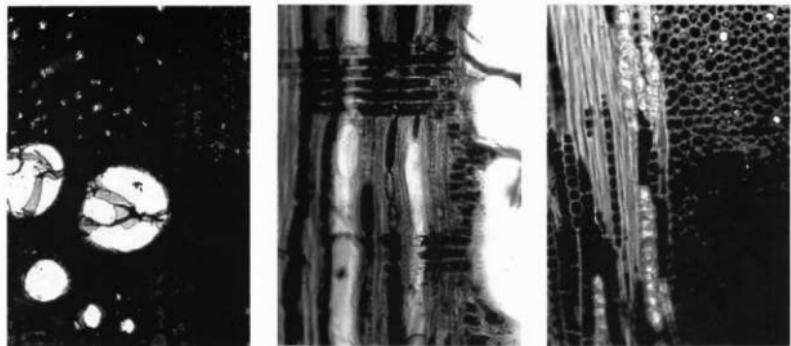
3) 千石町出上湖へ(M1: ゴツラ)は同様体積換算による補正を行った14C年代、この他の未補正の14C年代である。

4) 枝(ケヤキ)の心材部の測定値

部より発見されている。一方、千石町は沿岸部より内陸に位置し、現在の神通川右岸、常願寺川や神通川が形成した扇状地の扇端付近に立地する。なお、今回確認された樹木群は、根株付近とみられる部分が残るものも認められたものの、立木の状態は確認されていない。そのため、現地性の明らかないわゆる埋没林と判断するには、これらの状況を明らかとする必要がある。現段階では、幹径が比較的大きい樹木が多いことや樹齢などを考慮すると、今回の調査地付近あるいは後背の扇状地上や集水域の比較的安定した土地条件に成立していた林分に由来する可能性が考えられる。

文献

- 藤井昭二・奈須紀幸(編), 1968, 海底林 黒部川扇状地入善沖海海底の発見を中心として. 東京大学出版会, 163p.
 林 昭三, 1991, 日本産木材 順微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
 古川知明, 2005, 神通川底出上遺物のこと. 草島校下の歴史, 第50号, 草島校下郷土史会, 1-10.
 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 I. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 II. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 III. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 IV. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 V. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
 木越邦彦・藤井昭二, 1965, 射水平野とその周辺産の炭質物の絶対年代とその意義. 放生津潟周辺の地学的研究. 富山新港資料調査編 II-2, 第一-港湾建設局伏木富山港工事事務所, 15-19.
 小林謙一, 2009, 近畿地方以東の地域への拡散. 弥生農耕のはじまりとその年代 西本豊弘(編), 新弥生時代のはじまり第4巻, 55-82.
 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.
 Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E., 1989, IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].



1. コナラ属コナラ亜属コナラ節 (No.1) 左;木口、中;柾目、右:板目



2. クリ (No.3) 左;木口、中;柾目、右:板目



写真1 試料番号



写真2 試料番号

報告書抄録

ふりがな	とやましないいせはつくつちょうさがいよう じゅうご							
書名	富山市内遺跡発掘調査概要 XV							
副書名	太田本郷城跡・千石町地内埋没樹木群							
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	77							
編著者名	古川知明 高橋 敦 千葉博俊							
編集機関	富山市教育委員会 埋蔵文化財センター							
編集機関所在地	〒930-0091 富山市愛宕町1丁目2-24 TEL. 076-442-4246							
発行年月日	西暦 2015年3月31日							
所収文化財名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
太田本郷城跡	富山市 太田南町	16201	2010569	36度 39分 36秒	137度 14分 34秒	19910917～ 19910919 20000424～ 20000425	35 1,794	市道拡幅工事 駐車場造成
千石町地内埋没樹木群	富山市千石町	16201	2010444	36度 41分 04秒	137度 12分 30秒	201405	1,278	施設建築に伴う土質試験
所収文化財名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
太田本郷城跡	散布地	弥生		弥生土器				
	城館跡	戦国	掘立柱建物・堀	かわらけ・珠洲・青磁・煉瓦			堀幅 10m	
千石町地内埋没樹木群	集落跡	弥生	自然堆積	埋没樹木群			弥生中期の年代	
要約	1 太田本郷城跡 戦国後期の平城跡である。平成3年・12年の調査により、南辺及び東辺の堀跡及びそれによって囲まれた曲輪面を確認した。東辺の堀の規模は、最大幅10m、深さ1.2mである。南辺の堀内からは300点を超えるかわらけ・珠洲・青磁・赤漆片・煉瓦片が出土した。堀底面からやや浮いた状況であることから、城館構築後しばらくの期間経過してから一括投棄されたものと考えられる。 かわらけの年代は16世紀後半のものであり、太田本郷城が上杉方鰐坂長実のち河田長親の據る陣城として表れる元亀～天正年間に該当している。これらの遺構・遺物は、その陣城にかかるるものと考えられる。							
		出土したかわらけの一つには、「八月三十日」等の月日を含む16文字の墨書きがある。史料には8月30日の記録は見えないものの、元亀～天正年間の上杉氏関連の戦いに関連し、戦勝祈願等祭祀行為として書付庶民されたものと推定される。						
2 千石町地内埋没樹木群 千石町遺跡基盤の自然堆積層、地下6m付近から多くの埋没樹木群が掘り上げられた。樹種はクリ・コナラ属で、AMSによる年代測定により約2,300年前と判明した。洪水による流木であり、樹根が健在なことから、比較的近傍地に自生していたものか。周辺でも河川流路跡が露出しており、その方向から神通川による洪水跡と推測される。								

富山市埋蔵文化財調査報告 77

富山市内遺跡発掘調査概要

2015（平成 27）年 3 月 31 日

編集・発行 富山市教育委員会埋蔵文化財センター
〒930-0091 富山市愛宕町 1 丁目 2 番 24 号
TEL : 076-442-4246 FAX : 076-442-5810
E-mail : maioubunka-01@city.toyama.lg.jp
印刷：有限会社ヤツオ印刷

